

加曾利 E 式土器の細分になぜ混乱が生じたのか？（概要）

大村 裕

関東地方を中心に分布する縄紋中期後葉の加曾利 E 式土器は、出土遺跡・出土量共に他型式に比べて膨大なことと、その設定当初における標準資料の提示に問題があったため、これに取り組む研究者間の意見の統一が難しく、種々の細分案が提起されている。細別の概念ばかりか表記の仕方も区々である。今回出席している発表者の方々の間にも立場の違いがあるので、この混乱の経緯を簡潔に解説しておきたい。ただし、それを文章化するには相当な分量の紙数が必要なので、要点を以下に箇条書きにまとめてみる（第1図も参照されたい）。

1. 型式提唱者の中心人物（山内清男）が加曾利 E 式土器（加曾利貝塚 E 地点 1924 年出土）の標準資料を提示しなかったことが混乱の始まりであった。
2. 山内清男の「加曾利 E」は東京帝国大学人類学教室が発掘した「加曾利貝塚 E 地点」出土土器を指示するものであった〔後年の山内編年によれば「加曾利 E2 式」／大木 8b 式並行（註 1）〕。この時、加曾利貝塚 D 地点からも類似する土器が発見されたが、それは体部に「磨消縄紋」を施したものであった（後年の山内編年によれば「加曾利 E3 式」／大木 9 式並行）。この二者は、1937 年に発表された「縄紋土器の細別と大別」という短報に付載された編年表に「加曾利 E」と「加曾利 E（新）」という形で示された（第 2 図左）。
3. 1940 年に自費刊行された『日本先史土器図譜 第 IX 輯』の図版解説において、山内は宮城県・大木囲貝塚の層位的発掘所見や千葉県松戸市上本郷貝塚の発掘所見にもとづき、「加曾利 E 式土器」には、①「最も古い部分」（大木 8a 式並行）、②「古い部分」（大木 8b 式並行）、③「新しい部分」（大木 9 式並行）、④「最も新しい部分」（大木 10 式並行）の 4 つの小細別型式が存在する可能性を示唆したが（山内、1940 → 1967:25 頁）、『日本先史土器図譜 第 IX 輯 図版』では①「最も古い部分」（大木 8a 式並行）と③「新しい部分」（大木 9 式並行）の土器写真しか示さなかった（一部分を本稿第 3 図に転載）（註 2）。このため、この重要な記載はほとんど注意されることはなかった。
4. 戦後、山内（1937）で示された「加曾利 E」と「加曾利 E（新）」に、各々「加曾利 E I 式」、「加曾利 E II 式」の呼称が付けられた〔芹沢、1956:60 頁（第 2 図中央）；吉田、1956:139～140 頁。ただし、この時点の吉田による「加曾利 E II 式」の認識は、体部装飾において磨消縄紋の存在だけでなく、「隆起線による懸垂文」や「沈線文」による文様描出も含めている（140 頁）。山内清男が「別の型式に属する」と指摘した連弧文土器も加曾利 E II 式に入れている。吉田はこの論文において『日本先史土器図譜』を参考文献に挙げて居らず、参照してもいなかったようである（註 3）〕。
←この論文が収載された『日本考古学講座』（河出書房）は、「戦後考古学を集大成した」（向坂鋼二、1999:54 頁）ものとされ、多くの読者を獲得している。
5. 以後、「加曾利 E I 式」（大木 8a 式並行と同 8b 式並行の階段を包括）と「加曾利 E II 式（磨消縄紋あり）」の呼称が広く深く学界に定着した。

6. 吉井城山貝塚の報告書（岡本、1963）において、「加曾利 E II 式」〔口頸部に文様帯が存在、体部には磨消縄紋あり。山内の「新しい部分」（大木9式並行）に相当（第4図1～2）〕と、山内が「新しい部分」の土器に「伴存する」とした、口頸部文様帯を欠く土器（第3図3～4）に近似する土器群（口頸部の文様帯が欠落）を「加曾利 E III 式」に分けた（第4図3～4）（岡本、1963：32頁）。層位的にも、前者が「貝層直下・貝層（古）」から主体的に出土しているのに対し、後者は「貝層（新）」に主体的に出土していることが示されている（33頁）ので、比較的説得性があった。←ただし、埼玉県志久遺跡第4号土壙（笹森・城近ほか、1976）などにおいて「岡本・加曾利 E II 式」（岡本、1960:23頁の「第3図1」と類似）と「岡本・加曾利 E III 式」の共伴が確認されている（第5図参照）。

7. また、これらの土器群の上層（「上部貝層直上および黒土層」）出土の一部の土器（微隆線や橋状把手が付けられるもの）について、「加曾利 E III 式土器に続くもの」と位置づけた（岡本、1963:33頁）。ただし、これらは細片がほとんどで、全体の器形が判るのは僅少であった（第6図1など）。後年、この種の土器群は、「加曾利 E IV 式」と呼称される（杉山、1965：93頁）（第6図2参照）。

8. 1965年刊行の『日本の考古学 II 縄文時代』（河出書房新社）収載の岡本勇による「加曾利 E 式土器」の挿図（第6図3～5）と解説（加曾利 E I 式、同 II 式、同 III 式、及び「将来新しい型式として認定すべきもの」／加曾利 E IV 式）が、団塊世代前後の若い研究者に広く浸透してゆく〔大村もその一人。ただし、堀越論文（『信濃』24巻2～4号 1972年）の公表で、一時大きく動揺したことあり〕。

9. 1975年、能登 健による「山内・加曾利 E 式細分」の見直しに関わる画期的研究が公表される（能登、1975）。すなわち1956年において吉田格によって紹介された「加曾利 E I・II 式なるものが山内清男の加曾利 E・加曾利 E（新）と対応されるならば、当然加曾利 E I 式は大木8a・8b 式、加曾利 E II 式は大木9・10式と併行関係にあるはずである。」と看破する。そして、1940年に山内清男は、加曾利 E 式の「古い部分」を「最も古い部分」と「真の加曾利 E 地点の土器の大多数及び下総上本郷貝塚 E 地点の土器」の2つに細分することを明言しているのだと指摘する。これは、芹沢長介をはじめとする戦後派の多くの研究者が見過ごしていた重要な指摘であった。それが、「いつの間にか山内清男の二細分〔引用者註：「加曾利 E」と「加曾利 E（新）」〕が I・II 式とされ、三細分〔引用者註：昭和22年の、江坂輝弥が『考古学ノート2』（1957年）において紹介した山内編年〕が I・II・III にされ、混乱が助長されていった。（中略） I・II・III・IV なるローマ数字による細分に大混乱の原因が」あるのだから、「これらの数字を排除し」、山内論文（1969）に示された、「（加曾利 E）1・2・3・4のアラビア数字に書き変えること^{ママ}によって完璧となるはずである」と主張する（能登、1975：49～50頁。括弧中の語句は引用者）。←本稿の第1図も参照すると理解しやすい。

10. 能登論文に対しては、「山内氏自身、加曾利 E1, 2, 3, 4については何も解説していない。何と云っても胴部に磨消縄文が現れる段階をもって加曾利 E II 式とすることは学界で定着しており、これをずらすことは混乱を招くおそれが大きい。」（今村、1977：46頁）（註4）、「それ（引用者註：山内編年）を認めると密室編年を認めることになる」（米田、1980：405頁 傍点は原文のママ）、「山内博士以後の膨大な研究の蓄積を無視する訳にも行かない」（鈴木徳、1994：90頁）等々という意見が多数寄せられる。

11. かくて、細別をアラビア数字（1～4）で表す研究者は基本的に山内編年に従い〔各研究者で温度差あり。岡本編年に準拠していながら、表記はアラビア数字にしている研究者もいる（『縄文時代研究事典』東京堂出版、1994年）〕、細別をローマ数字（I～IV）で表す研究者は、基本的に岡本編年（1965）に準拠している傾向がある（各研究者で温度差あり）。

12. 能登論文以降の複雑な様相については黒尾（1995）が参考になる。

註

- (1) このことに関する詳細な考証は大村（2007）を参照のこと。
- (2) 山内は、東北南部に分布の主体を置く、大木諸型式の標準資料を生涯公開しなかった。1961年に小岩井が『岩手県史』（1巻）で、その写真図版を公表する（小岩井、1961）まで、関東地方の研究者にはその内容はほとんど周知されていなかったのである。従って、大木式編年との対応関係への目配りが乏しかったのは致し方ないことであった（岡本勇など）。
- (3) 塚田（1976）によると、『日本先史土器図譜』の発行部数はわずか200部、その中の100部は戦災で焼失してしまったということである（23頁）。多くの研究者は、この文献に接することが1967年まで困難な状況であり、この文献を書き写したり、写真に撮ったりして勉強していた（塚田の遺品の中から確認：大村）ということである。吉田が1956年当時『日本先史土器図譜』を参照出来なかったのは、こうした事情が存在していたと推定される。
- (4) 山内清男が加曾利 E1～4式について、「何も解説していない」という今村の指摘は、厳密に言うとうたらない。大村（1995・2007）は、山内清男の諸論文を丁寧に分析して、「山内・加曾利 E 式細分」（1969年）の輪郭を、ある程度浮彫りにすることに成功している。ちなみに筆者は、誤りが見つかったら潔く撤回する立場にある。

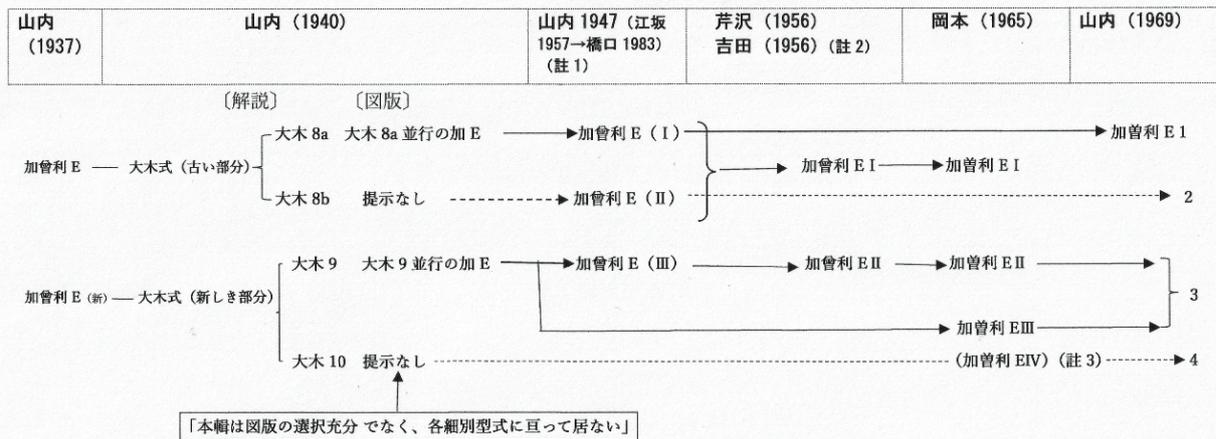
参考・引用文献

- 今村啓爾 1977「称名寺式土器の研究（下）」『考古学雑誌』63巻2号 日本考古学会
- 大村 裕 1995「IV. 考察 中峠遺跡第3次調査出土の加曾利 E 式（古）土器の検討」『下総考古学』14号 下総考古学研究会→大村裕『日本先史考古学史の基礎研究』（六一書房 2008年）に再録
- 大村 裕 2007「山内清男の大木諸型式（7b～8b式）について—関東地方の土器編年との関わりから—」『下総考古学』20号 下総考古学研究会→同上に再録
- 岡本 勇 1963「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（二）」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』7号 横須賀市博物館
- 岡本勇・戸沢充則1965「II 縄文文化の発展と地域性 3 関東」『日本の考古学 II 縄文時代』河出書房新社
- 黒尾和久 1995「縄文中期集落遺跡の基礎的検討（I）—時間軸の設定とその考え方について—」『論集 宇津木台』第1集 宇津木台地区考古学研究会
- 小岩井末治 1961「二 大木式土器について」『岩手県史』1巻 岩手県
- 杉山荘平 1965「茨城県新治郡出島村岩坪貝塚調査概報」『史観』第72冊 早稲田大学史学会
- 鈴木徳雄 1994「称名寺式の形成と施文域—文様構成の地域的伝統と型式変化—」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4 東海大学校地内遺跡調査団
- 芹沢長介 1950『古代土器標本解説書』第2集1 ドルメン教材研究所
- 芹沢長介 1956「縄文文化」『日本考古学講座 3』河出書房
- 塚田 光（無署名） 1976「3. 山内編年と日本先史土器図譜」『下総考古学』6号 下総考古学研究会
- 戸沢充則 編 1994『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 戸田哲也 1981「2. 加曾利 E 式土器編年の現状と課題」『神奈川考古 シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題』11号 神奈川考古同人会
- 能登 健 1975「縄文文化解明における地域研究のあり方—関東地方加曾利 E 式土器を中心として—」『信濃』27巻4号 信濃史学会

加曾利 E 式土器の細分になぜ混乱が生じたのか？

大村 裕

- 橋口尚武 1983 「加曾利 E 式土器の研究史的考察—特にⅢ・Ⅳ式土器を中心として—」『考古学雑誌』69巻1号 日本考古学会
- 堀越正行 1972 「加曾利 E Ⅲ式土器研究史 (1) ～ (3)」『信濃』24巻2～4号 信濃史学会
- 向坂鋼二 1999 『岡本勇先生追悼文集 岡本勇 その人と学問』岡本勇先生追悼文集刊行会
- 柳澤清一 1985・1986 「加曾利 E 式土器の細別と呼称 (前・中編)」『古代』80・82号 早稲田大学考古学会
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1巻1号 先史考古学会
- 山内清男 1940→1967 『日本先史土器図譜 第Ⅸ輯』(再版・合冊) 先史考古学会
- 山内清男 1969 「縄紋草創期の諸問題」『MUSEUM』224号 東京国立博物館
- 吉田 格 1956 「Ⅲ 各地域の縄文式土器 関東」『日本考古学講座 3 縄文文化』河出書房
- 米田明訓 1980 「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年—所謂『唐草文土器』を中心として—」『甲斐考古』17巻1号 山梨県考古学会
- 米田明訓 1981 「(1) 山梨・長野側からのコメント」『神奈川考古 シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題』11号 神奈川考古同人会



第1図 加曾利 E 式細別観の変遷図 (大まかな概念図)

註1 「山内 (1947)」は、「原始文化研究会」等で山内が発表したものを江坂 (1957) が「縄文文化編年の研究の変遷」の一覧表に挿入したものである。ただし、江坂作成の肉筆の表 (橋口、1983: 72 頁に転載) には、「加曾利 E」の細別にローマ数字は振っていない。「加曾利 E→加曾利 E→加曾利 E」とのみ記載されている。ローマ数字は、編集の過程で挿入された可能性がある。

註2 柳澤 (1986) によれば、細別型式のローマ数字表記は芹沢 (1950 等) が嚆矢という。吉田はこれに倣ったのではないかと柳澤は推定している (107 頁)。

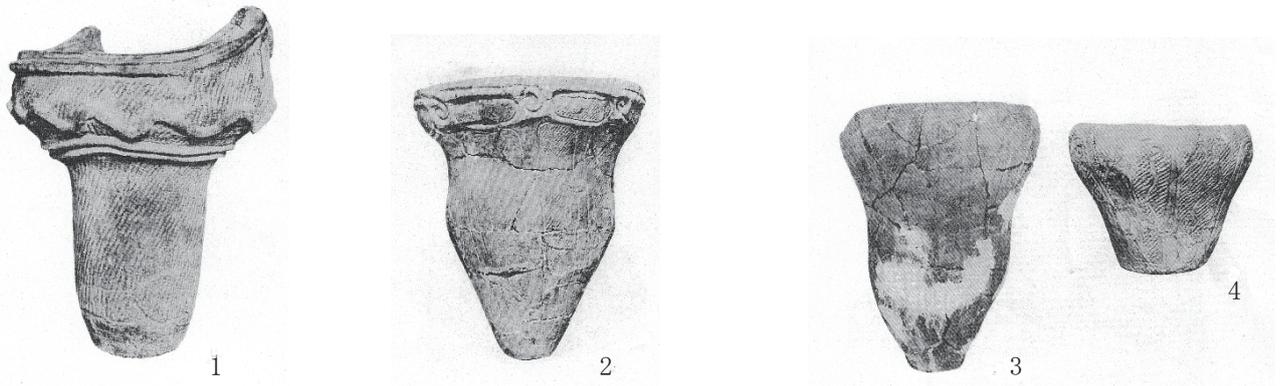
註3 岡本 (1965) の本文には「吉井 (城山) 貝塚では、加曾利 E Ⅲ式土器の上層」出土の「口辺部文様をほとんど失った土器の一群」に対し、「将来新しい型式とすべきものと思われる」とのみ記載 (117 頁 括弧中の語句は大村)。巻末の「縄文式土器編年表」には「加曾利 E Ⅲ」の直後に「加曾利 E IV」が配置されている。

山内 (1937)		芹沢 (1956)	岡本ほか (1965)	
陸前	関東	関東	関東	東北
大木7a " 7b " 8a、8b " 9、10	五領台 阿玉台・勝坂 加曾利 E 加曾利 E (新)	加曾利 E { II I 勝坂・阿玉台 五領台	五領ヶ台 下小野 勝坂 I 阿玉台 I 勝坂 II 阿玉台 II 加曾利 E I 阿玉台 III 加曾利 E II 加曾利 E III 加曾利 E IV	糠塚 大木7a 大木7b 大木8a 大木8b 大木9古 大木9新 大木10

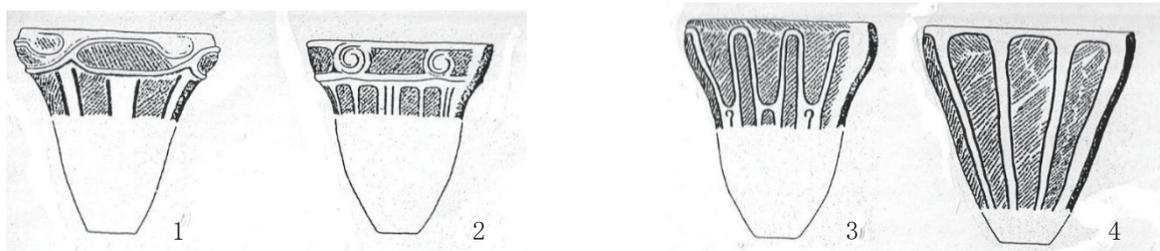
※この編年表は、古い土器型式が下に配置されている。

※東北地方の編年は、主に大木諸型式を抽出。
「加曾利 E II」と「大木8b」を並行させている事実注意到。

第2図 山内 (1937)、芹沢 (1956)、岡本ほか (1965) の関東・東北地方の中期縄紋土器編年表の比較



第3図 1は加曾利 E 式の「最も古い部分」、2は「新しい部分」、3～4は2に「伴存」する「加曾利 E 式の新しい部分」
(山内、1940→1967による)

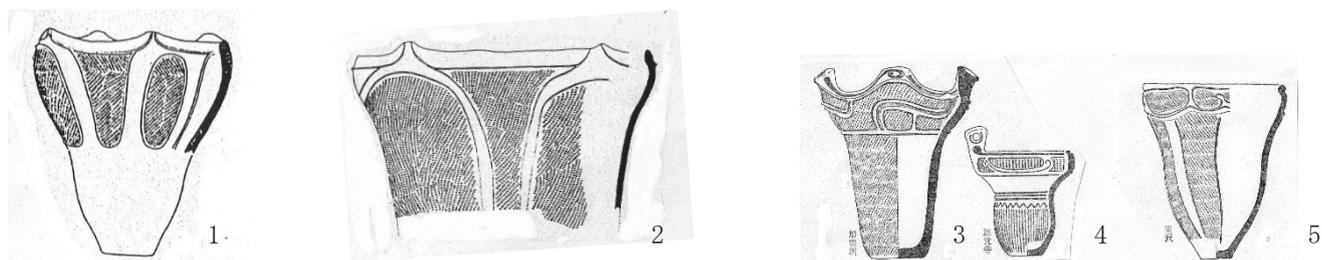


第4図 岡本勇 (1963) が抽出した「加曾利 E II 式」(1～2) と「加曾利 E III 式」(3～4) (抜粋)

加曾利 E 式土器の細分になぜ混乱が生じたのか？
大村 裕



第 5 図 埼玉県志久遺跡 4 号土壌とその出土土器（1～4 は、「重なって出土」したという）。岡本の主張する「加曾利 E II 式」と「加曾利 E III 式」が共伴した事例〔山内（1940）の指摘を傍証する事例〕



第 6 図 岡本（1963）で抽出された「加曾利 E III 式土器に続くもの」（1）、杉山（1965）で示された「加曾利 E IV 式」（2）、岡本（1965）で示された「加曾利 E I 式」（3～4）と「加曾利 E II 式」（5）